

町民参加の町史づくり

竹富町史たより



1993.9.30(木)

第4号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地
TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

目次

写真集「ばいぬしまじま」の発刊	1
島じまの写真	2
写真にみるわが町	5
聖地めぐり	6
新聞で知る町の今昔	7
文化財探訪	8
戦跡をたずねて	9
戦時・戦後体験記録の募集要綱	10
歴史の証言	
— 村役場の小浜島移転 —	11
県地域史協議会総会	17
文化短信	18
地名あれこれ	18
受贈および購入図書	19
業務日誌	22
編集後記	24

表紙の写真

鳩間島の友利御嶽で行われた雨乞い儀式に参加した神司のみなさんである。前列中央の女性は最高位の神司であろう。八重山が生んだ言語学者・宮良當壮博士が1923年（大正12）に撮った貴重な写真資料である。（写真提供・宮良当章さん）

写真集『はいぬしまじま』を発売

—写真九百二十四枚を収録—

竹富町の写真資料を集めた写真集『はいぬしまじま—写真にみる竹富町のあゆみ—』を、このほど発行しました。平成

二年度に刊行された『竹富町関係文献目録』に次ぐもので、別巻3と位置づけ二年がかりでまとめました。写真集は明治

いする一方、事務局も各島々に出掛け、各家庭に保管されている写真を拝見させていただき、その場で複写収集しました。さらに地元新聞社の協力を得て写真連載を行ない、地域住民に写真集発売をアピールしてきました。

写真収集は町内のほか本土、沖縄本島、石垣市の関係者にも呼び掛け、取り組みました。写真は町役場所蔵も含め、全部で一万三千枚余にも達しました。写真集にはその中から九百二十四枚を精選し、掲載しました。



写真集『はいぬしまじま』

の暮しを総合的に描き上げています。写真集の発行に向けては、平成二年度に構成作業を開始しました。写真集を発売するには、まず写真を収集しなければなりません。そこで町史編集調査協力員に写真収集をお願い

写真には歴史があり、古き時代を見る人に語りかけています。写真集の構成は、町が島々から成立していることに基づき、各島をベースに村落の自然、産業、交通、教育、文化、スポーツ、祭祀、芸能の柱立てに編集をしました。写真集を見ることで町の歴史、文化を少なからずとも概略的に知ることができると思います。

なお写真集は文教図書本店（那覇）、八重山支店（石垣）、山田書店（石垣）、ロマン書房（宜野湾）、夢屋書店（那覇）で販売しています。価格二千五百円。

島じまの写真

—暮らしを映し出す—

竹富町の村落、産業、交通、

教育等を盛り込んだ写真集『ば

いぬしまじま—写真にみる竹富

町のあゆみ—』を発刊しました

が、ページ数の関係上、掲載で

きなかった写真が数多くありま

す。むしろ掲載できなかった写

真の方が多いのです。そこで貴

重な写真を僅かながら選び出し、

特集を組みました。一万三千枚

の写真の中から九百二十四枚を

選定する作業は大変なことでし

た。中には断腸の思いで落とせ

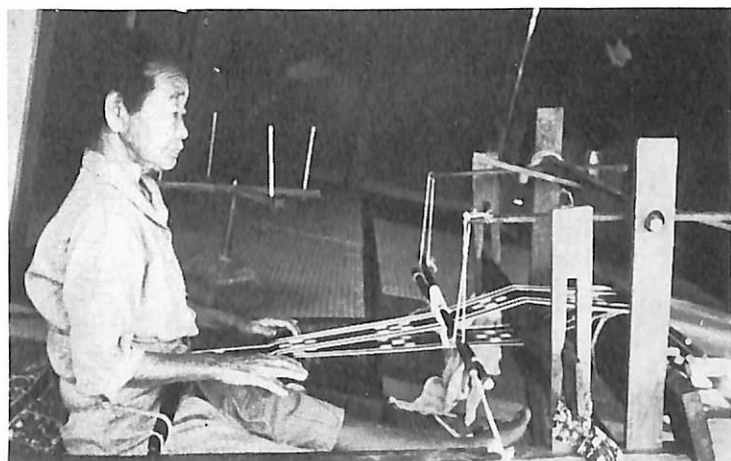
ざるを得ない写真もありました。

掲載できなかった写真はネガ、

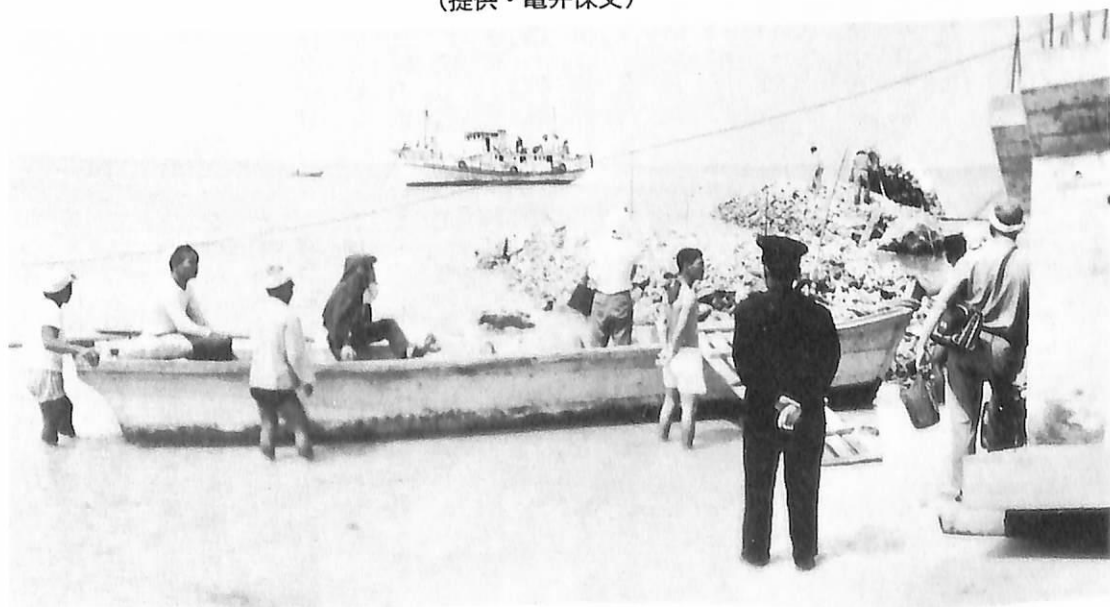
プリントにして大切に保管して

あります。なお町民に閲覧及び

利用にも供します。



地機でミンサーを織る亀井カントさん。(竹富)
(提供・亀井保文)



栈橋の建設工事。沖泊まりの船は定期船・八島丸。(波照間島)
1963年(昭和38)(提供・石垣市立八重山博物館)



仲本信幸氏所有のカツオ漁船・進幸丸(波照間)
(提供・仲本 時)



浜辺に旗頭が立ち盛り上がる節祭(星立)
1939年(昭和14)(提供・宮良長吉)



大原中学校の第八期卒業記念(大原)
1957年(昭和32)(提供・安里 富)



竹富村議会議員の第一回選挙時代の有力者
1918年(大正7)(提供・仲本 時)



鳩間郵便局の職員(鳩間)
1948年(昭和23)(提供・田代 浩)



サバ崎灯台。周辺海域は交通の難所だ(網取)
1971年(昭和46)(提供・石垣島地方気象台)



小浜廉好さんの還暦祝い(黒島)
1965年(昭和40)頃(提供・宮喜 清)



浦内川架橋建設の起工式典に出席した町関係者
1968年(昭和43)



猛烈な風雨で被害を受けた竹富尋常小学校（竹富）

《写真にみるわが町》

―台風被害―

八重山は一九三三年（昭和八年）九月十七日、大型台風に見舞われ、大きな被害を受けた。地元紙は「殺人的台風」と見出しをつけ、被害の様子を詳細に報道している。石垣島地方気象台に台風に関する資料がある。それによると台風の最低気圧は九四六・九ミリバール、最大風速五十・三m/s、総降水量三八六・九ミリの規模で一日中にわたり、吹き荒れた。

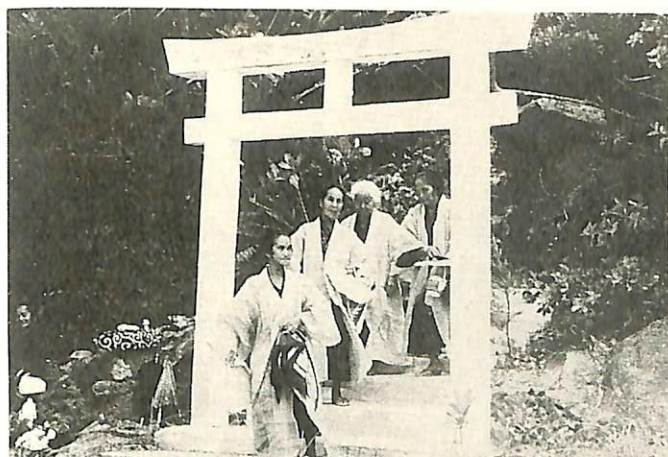
被害状況を見ると死者五人、負傷者四人、住家の全壊一六〇六戸、半壊一四九〇戸となっている。竹富村（当時）の学校は校舎の屋根が飛び、倒壊するなど壊滅的な打撃を受けた。当時、村財政は逼迫し、国庫補助による校舎の復旧となったが、補助金の支給まで時間を要することから、バラック小屋で急場をしのいだ。建築に際し、村当局は村民に奉仕的な労働力の提供を求めた。

大型台風の襲来は、六十年ぶりで島々に大きなツメ跡を残した。竹富島では住家五戸が全壊したほか、半壊の住家も多かった。棧橋は延長五十四メートルにわたり破壊され、養蚕は全滅。船舶の被害も大きかった。写真を見ると、猛威を振った台風の威力を伺い知ることができる。暴風で吹き飛ばされ散在する赤瓦、斜めになった建物など……。台風は人々の暮らしをどん底に陥れた。しかし復旧工事も進み、翌年には竹富尋常小学校の赤瓦屋根の木造校舎が落成した。

（通事孝作）

《聖地めぐり》

— 東御嶽 —



東御嶽で祈願を終えた神司たち（小浜）

小浜島は起伏に富み、港から南東にかけて孤形を描いている。港近くは砂浜が広がり、干潮時になると遠浅が続く。御嶽はアールヤマの聖地である。場所は港

から南東に直線で約一キロ離れた海岸沿い。そこには白い鳥居が建つ。

御嶽の由来は、島に語り継がれている。聖地は琉球王府時代、御用布の貢納のため上国する者の航海安全と無事を祈願した場所である。そのため「龍宮の御嶽」との別称もあり、関係者に親しまれている。海運業者が御嶽で航海安全を祈っており、御嶽信仰が息づいている。

集落内にある嘉保根御嶽と密接な関係にある。それは嘉保根の「遙拝御嶽」に対して「元御嶽」として重要な存在価値を有する。『琉球国由来記』巻二十一も記載されており、公儀御嶽だったことが分かる。創建年代は、明らかではないが、人头税の施行初期であろうことは推察できる。神名はスタタラ神本、イビ名は根根春神本である。兩名は意味不明で何に基づくのであろうか。

御嶽は鳥居をくぐり抜けると石階段があり香炉が一基置かれている。琉球石灰岩のアーチ状門を通り、さらに数階登りつめた所にイビが広がる。そこは神聖な空間で神司以外の者の出入りを禁止する。

拝殿はなく、御嶽の原始的な形態を止めている。敷石の上に石体を背にして香炉が設けられている。御嶽は森林を形成しておりテリハボク、リュウキウウマツ、アダンなどが生い茂り、神々しさを漂わせている。

トゥニムトウは宮里家。神司は嘉保根御嶽と同様、宮里家系統の子女が継承している。神行事は正月ニンガイ、二月、十月、タカビ、豊年祭など年間四、五回ほど。小浜小中学校東の林内に破風墓がある。これは昇天した娘の初代の神司を葬つてある、といわれ旧暦九月九日のイモ初上げ時には祈りを捧げる。

御嶽は森林に囲まれ、砂岩の小高い丘の上に形づくられているが、下部は岩盤が掘削され去る大戦中、特攻艇の発進基地になっていた。特攻艇は敵艦に体当たりする「人間魚雷」である。岩穴入口には「元第二震洋隊戦没者霊位」と書かれた位牌があり香炉とともに安置されている。御嶽は総称して島でワンと言う。この御嶽を住民はアールワンと呼んでいる。

（通事孝作）

《新聞で知る町の今昔》

—波照間島の磷鉍採掘—

島は琉球石灰岩に覆われた低島だが戦前、磷鉍が埋蔵されていることが明らかになり、企業注目浴びた。島の磷鉍が新聞で最初に報道されたのは一九二九年（昭和四年）五月三十日のこと。「先嶋朝日新聞」が島全体が磷鉍であり、発見者は塩谷東一郎氏で、生産額はラサ島の十五倍もある、と書き綴っている。

磷鉍の採掘に当たっては、その後、埋蔵量の品質の良否を見極めるため試掘が行われ、採掘区域の設定および経費問題に関して調査が続けられた。本格的な採掘に向けて塩谷東一郎氏、塩谷栄三氏、恒藤規隆氏の三氏は福岡鉍山監督局に採掘願いを申請していたが一九三三年（同八年）九月二六日、許可された。試掘は採掘許可の後も重ねられており、その中で塩谷氏は朝日化学肥料（株）と採掘協定を交わし、採掘の準備に入った。一九三

四年（同九年）七月六日には、朝日化学肥料（株）の佐古田政太郎氏が波照間島に渡り、磷鉍視察を行なっている。一方、恒藤氏は磷鉍区を詳細に調査し、事業計画を立て事業着手するため一九三五年（同十年）四月九日、波照間島に入った。

◎急告◎

波照間行人夫二百名

右至急募集す

本人來談アレ（自由出稼初給一圓）

朝日化学肥料株式会社

波照間 鐵業所

八重山出張所

（たかた商店）

恒藤氏は調査を終え「波照間の磷鉍は含磷歩合からいうと質が良い」「磷層も相当、豊富らしく島全体に点々と埋蔵されている」と語っている。磷鉍採掘が始まったのは記事を総合的にみて一九三三年（同八年）四月以降、と思われる。朝

日化学肥料（株）は慎重に磷鉍開発の方法を研究するとともに実地調査をしたが、その結果、絶対確定埋蔵量四二万トン、推定埋蔵量二百二十万トン、鉍質は最高四五%を示す良鉍と、はじき出した。

「先嶋朝日新聞」は一九三九年（同十四年）初め「磷鉍と海に輝く波照間島」と題しカコミ記事を三回にわたり連載。磷鉍の開発と水産業に関し書いている。その中で磷鉍の採掘もさることながら磷の積み出し港の整備があったことも取り上げている。それは延長七十メートル幅員二メートルの棧橋を設置することだが、港施設は県補助を受けて一九三九年（同十四年）に着工している。

磷鉍採掘は、肥料の原料供給を目指した企業経営だったが、戦前に幕を閉じた。磷鉍の採掘跡は北部落北側の原野にあり、鍾乳洞のような大きな口を開く。深さはかなりあり、坑道は地下深く横に延びている。（通事孝作）

《文化財探訪》

—クイヌパナ—

新城島の土地港南側に隆起石灰岩の岩礁がある。その小高い丘の頂上に四方形



土地港の近くにあるクイヌパナ(新城)

の石積みが配されている。そこがクイヌパナである。喜舎場永珣氏は『八重山島民謡誌』で「土や石を積み上げることを

俗に「地くい」といひ、ばなは頂上のことであるから「くいぬばな」は高く盛り上げた岡の頂という意である。この「盛(ムル)」は「牢屋大演主」といふ豪傑が新城与人のときに「火番岡」として高さ二丈五尺位に積み上げたもので、新城船着の西方に当たると綴っている。

クイヌパナは琉球王府時代に遠見台として機能していた。だが、いつ頃から使用されていたのかを明確にするのは困難である。『球陽』は一六四四年に各地に烽火台を置く、と記すが多分、クイヌパナは一六四四年以前から使用されていた可能性は充分に考えられる。

クイヌパナに関しては「越城節」と同様、島を代表する民謡「くいぬばな節」に謡われている。

くいぬばな登て 浜ゆ唄りば マカ
が布晒し うむしる見物

大石に登て 前干瀬ゆ見りば 松が
蛸といや うむしる狂言

高根久に登て 北向かて見りば 片
帆船で見りば 真帆どやゆる

大道頂に登て 東かい見りば 百合

や 花で見りば マルが袴
などの歌詞がある。

時代は人頭税下にあり、民謡は琉球王府へ納める御用布を仕上げる布晒しの様子、夫婦ゲンカや恋人同士の愛情物語などが軽妙なタッチで歌い上げられている。伝承によるとクイヌパナは、役人衆が山並みが続く西方の西表島を眺望しながら酒を酌み交わし、さらに若者が恋を語り合った場所ともいわれる。

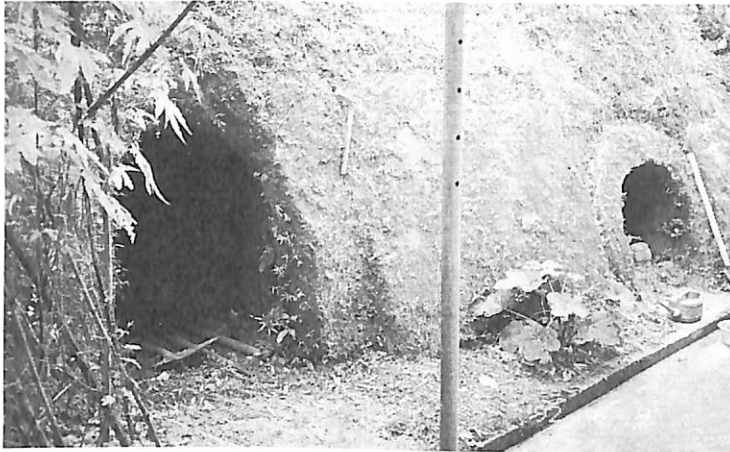
クイヌパナに登ると「くいぬばな節」で歌われた様子がイメージ化される。温故学会が所属する「新城島之内、土地村全図」には遠見台と明記されている。島の北側にも遠見台があり、タカニクと呼ばれている。『八重山島諸村公事帳』には「たかねく」とある。このことからタカニクは、新城村の公的な遠見台だったことは否めない。クイヌパナは、タカニクの補充的な役割を有していたのである。それは下地島の中森と結び付いていた。

(通事孝作)

《戦跡を訪ねて》

— 防空壕 —

八重山は太平洋戦争中、地上戦はなかったものの、米軍機の激しい空襲に見舞われた。最初の空襲は一九四四年（昭和十



民家に設けられた防空壕(祖納)

九)十月十二日で住民を恐怖陥れた。以後、激越さを増していった。西表島も他島と同様に空襲を受け住民生活もままならぬ状況になった。空襲に備えて住民は、屋敷内に防空壕を造り、身の安全を守った。それは庭の隅や道路脇に掘ったものから、丘を繰り抜いたもの、杭木を敷き並べたものまで多様だった。中には自然の洞窟や墓を利用したものであった。戦争が進む中で一九四三年（同十八）頃から学校でも壕掘りが日課となった。町内会でも防空壕の設置が義務づけられた。戦争が激しくなる中で空襲警報が連日のように発せられた。こうなると防空壕は生活に不可欠となった。警報のたびに住民は防空壕に駆け込んだ。住民の間に恐怖心が広がり、暮しに変化が見られた。中には壕に逃げ遅れて入って来る住民を白眼視する人も出た。特に乳飲み児を抱えた母親は大変だった。

空襲は一九四五年（同二十）には一段と激烈を極めた。島々の住民は避難生活を強いられ波照間、鳩間、黒島の人々は西表島へ疎開させられた。祖納、星立の人々は、山中に難を逃れた。住民の中には米軍機の爆弾投下、機銃掃射により住居を失った人もおり、日常生活は苦難が続いた。護郷隊員として西表島西部にいた人の証言によると、空襲は特に白浜が激しかったという。事実、空襲による家屋の被害は白浜が飛び抜けて大きい。『竹富町誌』によると爆弾投下により焼失した民家は白浜百五十戸を最高に波照間二十六戸、上原二十四戸、小浜七戸、黒島、新城、大原それぞれ三戸。それに破壊された民家は大原二十六戸、祖納七戸、鳩間六戸、黒島五戸、竹富二戸、となっている。特に白浜の被害が大きいのは、船浮要塞の中核を占めたため米軍機の攻撃対象となったことが原因であろう。戦時中に各家にあった防空壕は、今ではほとんど姿を消した。現在、辛うじて祖納に数カ所、残っているだけである。それは砂岩質の小高い丘を掘り抜いている。御用済みの壕は物置場利用されている。

(通事孝作)

戦時・戦後体験記録の募集要綱

一、募集対象者

イ、戦前の竹富村民及び現在の竹富町民。

ロ、竹富町民で戦争を体験されたことのある方。

ハ、沖縄県内及び本土在住の竹富町出身者。

ニ、戦後復興で（生活等）竹富町内で体験された方。

ホ、当時、竹富町に駐屯していた軍隊等。

二、記録の対象期間

一九三一年（昭和六年）年満州事変～一九七二年（昭和四七年）五月

一五日本土復帰まで。

三、原稿の枚数

四百字詰め原稿用紙の五枚から二

○枚程度

四、原稿の締切

平成六年三月末日までとする。

五、収録決定は、竹富町史編集委員会

が行います。

六、収録の場合添削することがあります。

七、収録された方には冊子（体験記録）

編集取材協力記念タオルを進呈します。

八、提出した原稿は、返却いたしません。

九、原稿には、住所、氏名、現在の年齢、昭和一九年当時の年齢生年月日、

職業もお書きの上、左記竹富町史編集室あてにお送り下さい。

十、聞き書きをしてもらいたい方も下記へご連絡下さい。

連絡先

〒九〇七

沖縄県石垣市字大川一〇番地

竹富町役場（町史編集室）

☎〇九八〇八一―二一九九八五

戦争体験記録の意義

太平洋戦争が終結して四十九年目に入りました。当時、若者だった人々も時の流れの中で高齢者となり、戦争体験者の高齢化進んでいます。そのような中で戦前の社会を浮き彫りにし、戦争の実相を確実に掌握する視点から体験者の証言を記録に止め、戦争資料として残す必要があります。

戦争体験者の証言を記録保存することは歴史の発掘でもあり、竹富町史編集にとっても極めて重要なことです。戦後世代が増え、戦争体験の風化が懸念されているが、戦争を直視し、恒久平和を願う立場から、戦争体験記録を速やかに集成し、戦史の証として後世に伝承していくことは大切なことと考えます。

八重山は沖縄本島のように米軍の上陸や戦闘はなかったが、激しい空襲、強制疎開によるマラリア禍が猖獗を極めました。戦争を歴史の一ページとして記録することは意義のあることです。

《歴史の証言》

―村役場の小浜移転―

語り手 大嵩秀雄(88)

小浜二〇番地

聞き手 通事孝作

△フロローグ△

竹富村役場は一九三八年(昭和十三)、離島行政の円滑を図るため竹富島から石垣島に移転した。以後、今日まで続いているが太平洋戦争中の一九四五年(同二十)六月、一時、小浜島に移転した。それは戦局が激烈を増す中で、日本軍の強制指示に基づき移設させられた。関係者の証言によると「村民と共に玉碎せよ」との命令が村幹部に下り、職員一同、小浜島に渡ったという。村役場は民家を借り、職員は家々に下宿した。当時、村職員で移転状況を知る大嵩さんを訪ねた。

―戦時中の竹富村役場については先に一度、お伺いしたことがあります。今回

はさらに詳しく村政や役場移転について教えて下さい。当時、村役場は石垣島のどこにあったのでしょうか。

大嵩 その前に村役場移転までの経緯を話したいと思います。昭和二十年になると敵が上陸する、とのことで軍の方から「村役場職員は、村民と一緒に玉碎せよ」との命令が下った。当時の村長、玉盛淳博さんと助役の幾乃伸さんの二人は軍に呼ばれて各島住民の疎開先の指示を受けてきた。波照間島は西表島の南風見、黒島は古見のカサ崎、竹富島と小浜島は島の各自の避難小屋へ移りなさい、ということだった。そして村役場職員は村民とともに玉碎せよ、とのことだった。

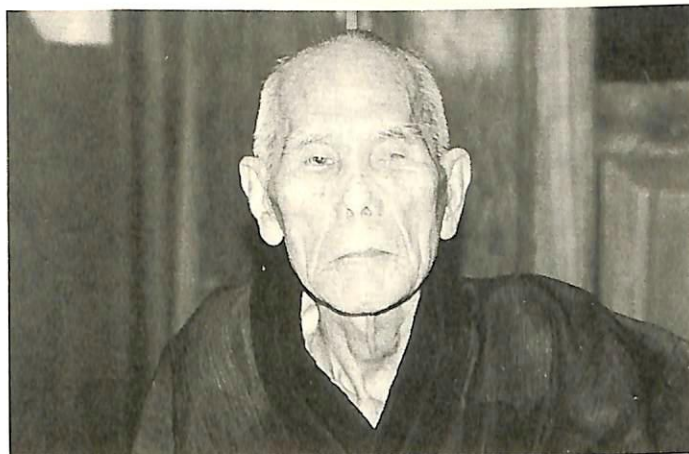
―戦時中、石垣島には宮崎旅団が配置されていました。軍命は宮崎旅団から出されたのでしょうか。

大嵩 多分、そうだと思います。軍の方から出たということですから。村役場についてですが、役場は現在の石垣市立八重山博物館の東隣にあり、民家を借りて行政事務をとっていました。

だが、役場行っても仕事のできる状態ではなく、出勤しても俸給がもらえません。辞めよう、と思っても辞められません。八重山支庁の大井支庁長は昭和二十二年四月か五月頃、空襲で亡くられました。その時、西表島出身の黒島孫助と私が出動していました。その時、空襲を知らせる警報が出たので二人は防空壕に入った。防空壕は役場の庭に簡単に掘ったものであった。防空壕には各島の地図と戸籍簿も入れ保管した。空襲後のことだが、そうすると憲兵隊員が来て「これは何か」質問するので「これは竹富村の財産です」と言う。「そんなものはいらぬ。焼き捨てる」と強引に焼却してしまった。憲兵隊の事務所は、現在の琉球銀行八重山支店の北隣にあった。二人の憲兵隊員の行動に当時、困ったものだった。

「村民とともに玉碎せよ」という軍命は二回出た。二回目も玉盛村長と幾乃助役が軍に呼ばれた。幾乃さんから聞いた話だが、二回目の時で、ある少

佐が日本刀を抜いて二人を威嚇した。「疎開命令を二回も出したが何故、村民と一緒に玉砕しよう、としないのか。お前から切り捨ててやる」と刀を振り



大嵩秀雄さん語る移場役

上げた。その時、二人は震えた。その後、村役場をどこに移転するのか、という事になった。討議した結果、移転先は小浜に決定した。この決定に

「大嵩君は小浜島出身であるので、事前に移転の準備をしない」ということになった。

昭和二十年五月三十一日に軍船で小浜島に渡った。役場移転に際して、吏員が住む民家も借りて置いた。当時、マラリアが流行しており罹患者も多かった。

戦争中は食糧は豊かではありません。幸いに私の家は父が田んぼで稲作をしていた。役場が移転した年は、稲は大いに実った。稲刈りには役場の職員を頼んだ。収穫後には職員に米を分け与えた。収穫後だが当時、島には精米所がないので白米にするためには瓶に米粒を入れて小さい棒でつく。そして殻を取り除く。そのような作業を繰り返した。新城収入役は波照間島から鶏を贈ってきてくれた。私はマラリアに罹っていたが、治りかけていた。鶏を食べる元気になった。

戦争中であり、行政どころではありません。行政の仕事はせず、食糧確保が大変だった。稲刈りで食糧難に備え

ていた。当時、小浜国民学校の校長は糸数用著氏だった。私が石垣島からきている、と聞いて会いにきた。そこでこう言われた。「戦争はどうなっているのか。役場が移転した六月一日は小浜校の創立記念日である。二人でも記念式典をあげよう」ということになった。六月一日に学校へ行き、校長とともに朝早く式を挙げた。そこで御真影に最敬礼させられた。

—役場は島のどこにあったのでしょうか。

大嵩 私の家です。島では朝、職員が出勤し昼になると、各自の家に戻った。出勤するが仕事らしい仕事がない。私の家には大きな桑の木が二本あり、その陰にテーブルを置いて仕事をすることもあった。役場ではくり舟を一隻、徴発して慣れている鳩間と黒島の人を採用した。

島には当時、現在ある製糖工場の離れた東方のジャングルに海軍の部隊が配置されていた。最初は旅井隊で、後に引野隊に替わった。旅井隊は八重山

に来る時、米軍の潜水艦の攻撃を受けた。軍施設は旅井隊が設置し、引野隊が使用した。島には水上特攻艇基地があったが、旅井、引野両隊は仲が悪かった。戦争だが昭和二十年六月には、負



上空から見た小浜島

け戦いが続いているが、軍は字民に聞かさなかつた訳です。

—戦争で仕事どころではなかつた、言われましたが、島では空襲はあつたのですか。

大嵩 はい、ありました。各家には防空壕があり、住民は空襲になると避難しました。私の前の家では石垣に二発、砲弾がありました。畑仕事をしていて空襲があると、小屋に隠れたり、田んぼではあぜ道に突っ込んだりして難を逃れました。

—話しは前後しますが、先ほど大舩支庁長の空襲による死亡を伺いました。当時の状況をさらに詳しく教えてください。

大嵩 村役場に私と大浜孫助が出勤した時に空襲がありました。砲弾が飛んで来たので防空壕に隠れました。壕には煙が入って来る。敵機が去つたあと防空壕内が臭くて壕から出ました。すると西方で大きな声が聞こえる。孫助と二人で駆け足で声の方へ行きました。そこは支庁長の官舎であつた。防空壕には大人二人、子供二人、女中一人が入っていました。防空壕に駆け寄ると兵隊が来て、上官の命令でスコップを使って土砂を取り除く作業をした。私たちも手伝つた。

最初に寝巻きをつけ、懐に煙草を入れた大人が見付つた。顔は分からない。その時、石垣町(当時)の翁長信全町長が「大舩支庁長はおととい散髪した。髪具合から分かる」と言い直接、弾丸で大舩支庁長が戦死されたことが分かつた。支庁の官舎は今の石垣市立文化会館の場所にあつた。西隣には八重山警察署があつた。

防空壕から大舩支庁長を掘り出すと次に登野原教育長のお父さん、女中が出てきた。そして人の声が聞こえた。兵隊は一生懸命に掘り出し作業を続けた。すると二人が出てきた。大舩支庁長は軍の車に乗せられ、陸軍病院へ運こばれた。これが大舩支庁長が戦死された時の状況です。

—村役場は石垣島では最初、民家を借りて行政を進めていた、と言われました。聞くところによると、その後、土地、建物を購入したということですが……。

大嵩 村役場は現在の八重山博物館の東隣から、八重山郵便局の南側に移りま

した。旧庁舎で今、町史編集室がある場所です。購入については八重山支庁長と宮古支庁長が軍用機で直接、逢うとともに電話で連絡をとり進めました。



村役場のあった大嵩さん宅

それは当時、地主が宮古島にいたからです。購入する前はそこで台湾の人が商売していました。その後、その人はどこに行ったのか、分かりません。ま

た今ある竹富町農協の場所も買い入れました。当時、農会長は玉盛淳博さんで、副会長は幾乃伸さんが務めていました。

村役場は戦時中に購入しましたが、土地および建物の代金は大舩支庁長が幾乃さんに任せました。すると資金がない。幾乃さんは、資金をどのように捻出したのか。形式としては村役場の土地、建物は農会からの寄付となりました。それで竹富村の財産となった。すると資金はどうしたのか。それは明らかにはできない。

—日本は太平洋戦争に負け、戦後になった訳ですが、村役場はどうなったのですか。小浜島からいつ、石垣島に移転してきたのですか。

大嵩 終戦直後です。村長はアメリカ軍任命より幾乃伸さん、助役は私が務めることになった。昭和二十年九月から十月にかけてです。

—終戦となり最初にどのような仕事から始めましたか。

大嵩 西表島に疎開していた住民は戦後

生まれ島に戻ってきた。我々は軍にお願いしに行った。波照間島の救済に行かなければならない、ということになった。波照間島の人々はマラリアに罹り悲惨な状態だった。軍にある米を貰い受けるため軍に陳情した。軍は十俵の米を与えてくれた。日本軍は戦争に負けたが、食糧はありました。まだ軍隊は解散していなかった。武装解除しているが食糧は各部隊で持っていた。米十俵を確保し、波照間島に渡った。团长は私が務め、塩井軍医のほか看護兵五人を連れて行った。

その時、カツオ工場の納屋から大釜を引き出してこれを用いて使った、釜は倉庫いっぱいにあった。大釜でお粥を炊いてサイレンで住民に伝えた。サイレンの音は遠くまで聞こえた。島の世帯は事前に調べてあるので、人数を考えお粥を炊いた。島の人々はみんなマラリアに罹りシラミがわき、お粥を貰いに来た。

—波照間島の住民は昭和二十年八月頃には島に戻っていますから、その後

のことだと思えますが……。

大嵩 波照間島の人には漁船を持っていません。島の人は海が上手であり、ウミンチュだから海のものを取る。それと合わせてお粥を住民に振る舞う。その時私が持ってきたマリアの薬を住民に与えた。アテプリンです。種類は黄色いものと白いものがありました。白いものは一般の人にあげる。黄色いものは特別の人にあげる。ということ軍医が持っているのは他の人のものとして預かった。それにダイナマイトも十発、軍から貰い上げた。その時、上里さんがいた。彼は兵隊あがり、救済団では彼を雇いダイナマイトで魚を取らせ住民に栄養つけさせた。

そのようにして活動した。島には一周間いました。島を見ているとあちこちでマリアで人が死んでいる。死人を葬るところではない。担架で死人を担ぐ人がいないのです。職員も作業しました。毎日が葬式の日々だった。家や墓は囲いをしており、死人は腐敗し墓に入れられる状態ではなかった。仕

方がないので石を積んで死人をかぶせるようなことをし今、考えると人間の生命とはそのようなものか、思っています。

—先ほど竹富村の財産である地図が軍により焼かれたと言われました。地図はきわめて大切な物です。その後、どうなされましたか。

大嵩 八重山は戦後、混沌とした状況でした。そのような中で図面である地図を何とかしなければならぬ。そこで「図面は税務署のものが本だから持つといけ」ということになった。それで貰ってきた。助役である私と収入役の森佐四郎と二人で行った。竹富村の図面は軍が焼いたので、貰ってきた図面は大切にしました。

当時、混沌としていた八重山は行政機関は機能せず、住民の不安は増していった。そこで自治会が発足した。自治会長には宮良長詳氏が選出された。衛生部長に吉野高善氏、経済部長には幾乃伸が就任した。その時、幾乃伸は竹富村で活躍していた。話は、ちよっ

と違いますが、その前に竹富村関係者が戦犯で引つ張られました。その時竹富村でも解放を求める陳情をアメリカ軍あてに出しました。

幾乃は当時、村長であり自治会の経済部長でもありました。税務課長は識名邦だった。先に話した図面のことですが、識名さんは図面の返却を要求してきた。「助役の大嵩と収入役の森が役場の天井裏に図面を隠してあるので、取って来い」ということだった。識名さんがいうには「あなた方に預けたのは返せ」ということだった。そこで「私たちは預かっていない。貰いはしたが、税務署から正本を持って行けといわれて貰ってきた。後で理屈でもって返せ、いわれてもそれは難しい」。そのようなことで識名さんと喧嘩をしました。

—その前に軍に図面を焼かれました。そこで税務署から図面を貰ったのですね。

大嵩 そうです。しかし自治会の税務課関係者は私がない時に幾乃が天井に

あるのではないか、ということでも森もいながら図面を渡してしまった。そうになると竹富村には何も残っていない。予算もない。職員の俸給も払いきれない。そのような状況で非常に苦労しました。

アメリカ軍政府ができた時、ラブレスがやって来て三人が呼び出された。そこで「竹富村の産業について書いて来い」と言われた。「石垣町の経済を書いて来い」と言われた。我々は「ハイハイ」と返事をし、敬礼して帰って来た。ラブレスからそのようなことを言われたが一体、何を書けばよいのか。毎日、相談したが全く考えられない。そうすると、また電話で呼ばれて「書いてきたのか」と言われる。「まだ書いていません」と答える。するとラブレスは怒って問いただす。怒られて帰って来ると「ラブレスが言っているのは配給手帳を持ってこい、ということではないだろうか」と考える。三日目に持っていくと「これでもない」と言われる。度々叱られて苦労しました。四

日目もまた呼び出されて行く。

私はそこで考えた。「ひよっとすると予算のことではないだろうか」。これを話すと合格となった。産業とか経済を書いて来い、ということは予算のことだった。これが戦後の予算の第一号で、私はお厚い大学ノートをもらった。ラブレスは「これに書いて来い」と言われた。厚い大学ノートは大浜や竹富の村長に羨ましがられた。そこで二人にノートを半分ずつわけて与えた。これは当時の最高の喜びでした。

――終戦直後の役場の職員は何人ぐらいでしょうか。

大嵩 おそらく十人ぐらいでしょう。戦前もほぼ同じぐらいです。

――十人ほどの職員で戦時中や戦後の苦労をしたのですね。八重山はマラリアがあり住民は悲惨だった。波照間のほかに別の島にも職員は行ったのですか。

大嵩 それはありませんでした。西表島東部には行きました。それは戦争中のことで、見舞いに行つて来なさい、と

いうことでした。軍の船に乗って小浜まで行き、細崎で備船して西表島へ渡り、古見から歩いて大原へ行きました。波照間島の南風見へ疎開し、戦後は住民は島へ戻っています。終戦直後は波照間島を救済せよ、とのことだった。

――終戦直後はどのような仕事をしたのですか。

大嵩 波照間島の救済までは何もありません。大原では新城島の人々がきてイモなどを作っていました。私は助役を八カ月ほどやっていました。だが当時は食糧難です。そのため私は役場を辞め島に帰って来ました。故郷に戻つてくると区長に切り換えられました。

――八重山の戦争状況および役場の移転に至る経緯、当時の行政など貴重なお話を聞かせてもらいました。どうもありがとうございます。

県地域史協議会総会

—中城村で開催—

沖縄県地域史協議会（恩川尚代表）の一九九二年度総会及び研修会が、三月二十三日、中城村村民体育館で開かれた。総会では九二年度活動、九一年度会計の



1993年度活動計画等を決めた総会(中城村)

書く報告を原案通り可決。九三年度活動計画は二回の研修会、大正八年〜十年発行地図の関係資料の冊子化、復帰二十周年記念誌の発行、官報掲載沖縄県関係資料目録作成などに取り組み、とした。

総会は、最初に恩河代表が「あわただしい一年だった。今年度は民俗を統一テーマに活動してきた。振り返ると充実した研修会を行うことができた」とあいさつ。引き続き比嘉正一助役が「中城には数多くの史跡がある。中城の村づくりはこれからである。地方の時代といわれて久しいが、これは権限を地方に移譲するのではなく、地方の特性を生かした故郷づくりを行うこと、と考える。地域の歴史、文化、自然を踏まえ地域の個性を創出することが大切で、これにより地域の顔がつけられると思う。地方の特性を生かした地域史を編集して下さい」と歓迎の言葉を述べた。

総会に提案された議案は四件。九一年度活動は南風原町、沖永良部知名町、西原町での三回にわたる研修会と内閣文庫所蔵資料展、国立歴史民俗博物館を見学

した地域史ツアーが中心とされた。会計は収入十三万五千四百六十二円、支出十一万九千二百三十七円、差引残額一万六千二百三十五円。これに対して監査報告で帳簿の記帳及び証憑書類とも整備されている、と述べられ承認を受けた。

九三年度事業活動は七月に第一回、九月に第二回の研修会の実施、会誌は七月頃に第十六号、通年で「あしびな」の発刊することを内容としている。継続調査として「近代辞令書調査報告」「近世地方役人動書関係資料」を行うことを決定。「官報掲載沖縄県関係資料目録」「印土手石（ハル石）調査報告」作成、「地域資料カード化」作業に取り組むことも決めた。

総会の後、琉球大学短大部の赤嶺政信助教授が「地域史と民俗」と題し講演を行った。講演内容は日本民俗学の創始者柳田国男、折口信夫の研究経過に触れた後、民俗学と現在の接点について問題提起をした。総会に先立ち史跡巡検も行われた。

《文化短信》

◎：西表島北部の上原地区土地改良事業区域内で風葬墓人骨が発見され、町教育委員会は、昨年九月九日から十六日までにわたり、緊急発掘調査を実施した。調査は琉球大学医学部の土肥直美助教の協力を受けて進められた。人骨は全体で十七体以上、識別された。風葬墓群は上原集落の東南部、船浦との中間位置から野崎川沿いに入った丘陵斜面にあり、墓は隆起サンゴ礁の斜面に点在し、周辺の岩陰を利用してゐる。墳墓は五基、確認されたが一基を除き、土地改良区域内に含まれる。

上原地区は琉球王府時代に村落が形成され、村番所が置かれ繁栄した。しかし悪性マラリア等があつて入口が減り、黒島から強制移住が図られたが、衰微の一途をたどつた。大正時代末期には廃村の憂目に遭つた。風葬墓は旧上原村との関係が想起されるが、人骨の年代を把握できれば、さらに明確になるだろう。墳墓

は、上原の歴史解明に明るい材料を提供するとともに、墓制及び葬制を知る手掛かりにも結び付く。発掘調査報告書が待たれる。

◎：八重山、宮古に残存する火番盛が国指定の史跡になることが決定した。これは四月十六日、文化財保護審議会から文部大臣への答申により明らかになつたもので、官報に告示されて正式に決まる。今回は史跡、名勝、記念物など合わせて十一件にのぼつた。答申された火番盛は「先島諸島火番盛」と総称され八重山で十カ所、宮古で八カ所が良好に残つており今回、一括指定となつた。火番盛は、琉球王府時代の烽火制度により使用されたもの。「球陽」に烽火の記録があり、一六四四年に初めて採用された。これは通信制度で、進貢船や異国船の到来に迅速に対応するものだった。竹富町については小城盛（竹富）、ブスマリ（黒島）、タカニク（上地）波照間盛（下地）、大岳（小浜）、中森（鳩間）、コート盛（波照間）の七カ所が文化遺産として指定された。

《地名あれこれ》

—アカツアバナ—

小浜島にアカツアバナと呼ばれる地名がある。場所は小浜小中学校と小浜糖業（株）に至る区域。両区間には道路があり、地名は道路を指すのか、地域一帯なのか、判断としない。

古老の話によると戦前まで、道路脇にはリュウキュウマツの原木が茂り、緑陰を形成していた、という。

これに島びとは琉球王府時代の宰相・蔡温の林政によるものだろう、と推測する。しかし戦時中、旧日本軍がマツを徴用したため、一本も残っていない。一帯は現状、道路整備され土地改良があり、平地が広がる。

地名の由来について島研究者に尋ねたが、明確な解答は得られなかった。「バナ」は一般的に「岬角」を示すが、内陸に同名があるのはどういふことだろうか。

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名
山城善三	蟻螂の斧
"	沖繩の証言(上巻)
"	沖繩の証言(下巻)
"	沖繩の旅
"	歴史の旅
"	山原の火
"	琉球育英史
"	沖繩池間島民俗誌
"	軍閥興亡史
"	大太平洋戦争(上巻)
"	大太平洋戦争(下巻)
"	消えた沖繩県
"	沖繩の最後
"	沖繩あれから20年
"	沖繩はだまっていられない

山城善三

"	ペリー提督 沖繩訪問記
"	琉球芸能全集
"	大太平洋戦争秘史
"	諜報大太平洋戦争
"	沖繩戦史
"	戦場に生きた人たち
"	アメリカ戦略下の沖繩
"	戦火の中の沖繩刑務所
"	戦争を知らない世代へ 沖繩戦
"	琉球昔噺集
"	欽桑郷 辻情話史集
"	野国総官甘藷伝来
"	沖繩の民話
"	湛水親方物語
"	明治の文明開化 事始め
"	大動乱
"	孤島苦の琉球史
"	大東亜戦争全史
"	大太平洋戦記 沖繩の最後
"	日米最後の戦闘
"	みんなみの巖のはてに
"	日本の歴史
"	文化財の保護

〃 〃

日本の祭
 沖繩健児隊
 鉄の暴風
 沖繩今昔
 蔡温選集
 漢詩集 綵雲
 最後の沖繩県知事
 沖繩風土記全集 国頭村の今昔
 黎明期の海外交通史
 ひめゆりの島
 断頭台上の琉球王
 琉球百話
 日本の工芸
 紅茶キノコ健康法
 にんにくの効用
 夫死鳥のうた
 南日本文化史
 教育白書
 写真集 むかし沖繩
 忘れ去られるふるさと
 沖繩童謡集
 新説 阿麻和利
 女護ヶ島

中城村役場	中城村史 別巻1 新聞集成編
宜野湾市役所	宜野湾市史 第2巻 資料編 1
〃	宜野湾市史 第3巻 資料編 2
〃	宜野湾市史 第4巻 資料編 3
〃	宜野湾市史 第6巻 資料編 5
〃	宜野湾市史 第7巻 資料編 6下
西原町役場	西原町史 第3巻 資料2
県市町村30年史	沖繩市町村30年史
編集委員会	今帰仁村史
今帰仁村役場	今帰仁村史
全国町村会	全国町村会史
南風原村役場	南風原村史
上野村役場	上野村史
金武町役場	金武町史
与那城村役場	与那城村史
東風平町役場	資料 農学博士 謝花 昇
名護市教育委員会	名護 碑文記
斜里町役場	エソヒグマ
〃	流水への旅
牧野清	登野城村の歴史と民俗
八重山土木事務所	八重山土木事務所 あゆみ
大阪沖繩県人会	雄飛 大阪の沖繩
三木健	オキネシア文化論

購入図書紹介

多数の書籍を購入して
いますが紙面の都合上そ
の一部を紹介します。

編集者名	図書名	発行所名							
中山 満	沖繩の地理	新星図書出版	馬淵東一	馬淵東一	南島文学発生論	思潮社			
沖繩県姓氏家系大事典編纂委員会	沖繩県姓氏家系大事典	角川書店	馬淵東一	馬淵東一	馬淵東一著作集(1巻)	社会思想社			
網野善彦外5名	日本歴史と芸能(列島の神々)	平凡社	石垣正二	石垣正二	ぼくと八重山	川出書房新社			
沖繩文化編集所	沖繩文化	沖繩文化協会	古見光治	古見光治	豊かな森の仲間たち	ニライ社			
(株)新報出版	ふるさと自然百科	新報出版	浦崎 純	浦崎 純	死のエメラルドの海	月刊沖繩社			
県立図書館資料編集室	歴代宝案物・校訂本	沖繩文化協会	関 善三	関 善三	編纂印刷デザイン用語事典	誠文堂光社			
琉球新報編集局	現代沖繩事典	琉球新報社	(株)新報出版	(株)新報出版	ふるさと自然百科(離島編)	新報出版			
真栄田 勇	先島要覧	琉球新報社	富島壯英他	富島壯英他	真境名安興全集(一~四巻)	琉球新報社			
嘉手納 宗徳	遺老説傳	琉球新報社	喜舎場永珣	喜舎場永珣	八重山古謡(上・下巻)	沖繩タイムス社			
伊藤 幹治	沖繩の宗教人類学	角川書店	沖繩言語研究センター	沖繩言語研究センター	琉球列島における音声の収束と研究	沖繩言語研究センター			
サンゴ礁地域研究グループ	熱い自然	引文書堂	阿波根朝松	阿波根朝松	琉球古語事典	那覇出版社			
新崎 善仁	八重山民謡の考察	古今書院	宮良當壯	宮良當壯	八重山古謡(第一巻)	郷土研究社			
谷川 健一	わが沖繩	木耳社							
"	" (方言論争)	"							
"	起源論争	"							
"	日本の神々	白水社							

業務日誌

■一九九三年（平成五年）

三月二二日

沖縄県地域史協議会研修会「講演・地域史と民俗」

「史跡巡見」於中城村（職員二名参加二十四日まで）。

三月二五日

資料図書購入「ふるさと飛行」外二五冊。

三月二九日

竹富町特別職の職員で非常勤のもの報酬及び費用弁償に関する条例の一部を改正する条例（別表「職種別」に町史編集事務嘱託員を加える）の改正。

三月二九日

竹富町史編集嘱託員設置要綱の全部を改正する訓令の改正。

三月三一日

・竹富町史・別巻3、写真集「ばいぬしまじま」、印刷会社より二、〇〇〇部納品。

・竹富町史だより第三号発行。

宮良はるみ嘱託員辞任。

四月一日

嘱託員、通事孝作 更新。

四月五日

臨時職員 新本良明 任用。

四月六日

・町史編集室内定例会議、四月業務予定検討。

四月一三日

・「新聞集成」収録記事添削業務継続。
福祉課保存の援護関係（戦没者連名簿）資料収集及びコピー（七冊）。

四月二〇日

資料収集及び写真撮影のため、舟浮、白浜、祖納（職員二名日帰出張）。

五月一日

・人事異動、新盛勝一（主事）建設課へ、生盛大和（主査）町史編集室へ配属。

・「新聞集成」収録記事添削業務継続。

五月七日

町史編集室内定例会議、五月業務予定検討。

五月二六日

沖縄県地域史協議会保存の「官報」、沖縄県関係資料の借用交渉及び新聞集成の索引のパソコン利用による研修、沖縄市（職員二名出張二八日まで）。

六月一日

・「新聞集成」収録記事添削業務継続。

・パーソナルコンピュータ導入（九機種）設置。

六月二日

町史編集室内定例会議、六月業務予定検討。

六月八日

・資料収集（職員二名那覇出張十日まで）。

・「官報」沖縄県関係資料、コピー開始（約二万部）

七月一日

・「新聞集成」収録記事添削作業継続。

・「官報」沖縄県関係資料保存用としてコピー及びマーク付け作業継続。

七月二日

竹富町制施行四五周年記念式典挙行（竹富島にて開催、職員三名参加）。

七月一二日

町史編集室内定例会議、七月業務予定検討。

七月一七日

竹富町図書有償頒布に関する要綱制定。

七月三一日

先島文化交流会議「基調報告」「シンポジウム」於石垣市（職員一名参加）。

八月一日

先島文化交流会議二日目。石垣市内史跡巡見（職員一名参加）。

八月二日

・「新聞集成」収録記事添削業務継続。

・「官報」沖縄県関係資料保存用としてコピー及びマーク付け作業継続。

八月四日

町史編集室内定例会議、八月業務予定検討。

八月五日

「官報」沖縄県関係資料、約六万六、〇〇〇部 コピーを終える

八月七日

台湾の南波照間伝承と沖縄史跡など視察研修（職員一名参加

十一日まで）。

八月九日

沖縄県地域史協議会研修会「地域史におけるパソコン利用について」於糸満市（職員二名参加十一日まで）。

八月十六日

竹富町刊行物販売委託契約締結による「写真集」の販売を文
教図書八重山支店へ委託。

八月十八日

行政文書分類整理編纂保存業務委託契約（南山舎へ委託する。）

九月一日

・「新聞集成」収録記事添削業務継続。

・「官報」沖縄県関係資料マーク付け作業継続。

九月三日

町史編集室内定例会議、九月業務予定検討。

九月八日

戦争体験聞き取り調査、小浜島、大嵩秀雄氏から（職員一名
日帰出張）。

九月十七日

「第三回ばいぬ島まつり」で、写真出展準備（大原へ職員三
名日帰出張）。

九月十八日

「第三回ばいぬ島まつり」で、第二回写真にみる竹富町のあ
ゆみ展を開催（大原、離島振興総合センターへ全職員参加二
十日まで）。

九月二十八日

「官報」沖縄県関係資料マーク付け業務終了。

編集後記

◆「竹富町史だより」第四号を発刊しました。町史編集は平成十六年度までの長期にわたり、作業を進め一年に一度のペースで刊行する計画です。今回、町民及び関係者の協力を得て写真集『ばいぬしまじま』を発刊することができました。今号のトップは写真集の発刊で飾ることにしました。さらにはなかなか写真特集も組みました。

◆「歴史の証言」は大平洋戦争中に一時、小浜島に移転した村役場について当時、職員だった大高秀雄氏に登場してもらいました。歴史を掘り起こし、現代に語らしめる作業は、町史編集の根幹をなす分野でもあります。

◆「新聞で知るわが町」は現在、取り組んでおります『新聞編成』の関連性からシリーズ化しているものです。戦争体験記録への協力もよろしくお願致します。



竹富町史だより 第4号

平成5年9月30日 発行

編集発行 竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎ 09808 - 2 - 9985

印刷 八島印刷